

市民研会員から寄せられた

2014年私のおすすめ3作品

締め切り 2015年2月28日、到着順に掲載

● 杉野 実

今年はやや変則的に、「自然科学」と「社会科学」でそれぞれ複数の本を紹介し、これらふたつをあわせて共通の大テーマにふれることにしたうえで、中間部の（「中休み」にあたる）「人文科学」では、ちょっと特異な個人的体験に言及することにします。

◆長沼伸一郎『物理数学の直感的方法』（講談社ブルーバックス）

◆E.ベシヤン『流れとかたち』（紀伊国屋書店）

◆緑ゆうこ『植物になって人間をながめてみると』（紀伊国屋書店）

『直観的方法』は理系学生のための「アンチョコ」として定評があるけど、私がひかれたのは、「天体力学の成功にまどわされた現代科学は、世界の複雑さを本当にはとらえていない」とする「長めの後記」です。『流れとかたち』はそれとは対照的に、「物流の通路を太くする方向に世界は進化していく」といいきる、ある意味大変イデオロギー的な本。でも人間の介入で「単純化された」世界の行く末はどうなるかと、『植物になって』は警鐘をならします。バイオマスとはつまり植物をもやすことだから、微生物による分解過程を貧弱にすることになるのでは、との問題提起には考えさせられました。

◆「心霊科学研究会」の「霊査」体験

親戚の者につれられて行ったのですが、まず基本的な方法から説明します。名前はいかにもおどろおどろしいのですが、本質は瞑想であって、仏教の座禅とかかわらないと考えてください。数十分の集団瞑想中に、各人の「波動」から感じとったことを、あとで「先生」がそれぞれに伝える、というふれこみでした。仕事というか「自己実現」になやむ私には、「みな本質的に同じような人生を生きているのだから、自分だけ苦しいと思うな」。大変一般的な、「どうとでもとれる」こととも、とれますよね。「信じる者のあいだでだけ成立するリアリティ」もあるのだろうとも、思いましたが。

◆中山智香子『**経済ジェノサイド**』（平凡社新書）

M.シューマン『**スモールマート革命**』（明石書店）

近年よくいわれる「グローバル化」とは、「物流の通路を太くしての」世界の単純化を意識的にすすめることであり、経済学でそういう潮流を代表するのが、「マネタリスト」フリードマンである。ガルブレイスやドラッカーらと対照させて、『ジェノサイド』はそのように論じます。実はさきほどのベシヤンの本は、「通路が太くなる」進化は一方的なものではなく、それなりの役割をもつ「細い通路」は生き残る、として（現実に配慮して？）いたのですが、まさにそこから『マート革命』は議論を出発させました。「グローバル化と個性」というのは、すぐれて経済学的な問題でもあるのかもしれないね。

●吉岡寛二

今年は、「本」と「映画」と「配信」が一つずつです。

◆岸見一郎・古賀史健共著「**嫌われる勇気ー自己啓発の源流 アドラーの教え**」（ダイヤモンド社）

初版は2013年12月12日ですが、私が読んだのは第4刷・2014年1月22日になっていますので、かなりの人が読んだのでしょう。紀伊国屋書店で「本の題が視野に入り」興味を持ったので即買いました。

学生時代から人間心理にはずっと興味があるのですが、自腹で購入して読む本は、どうしても偏ってしまいます。具体的には、「ユング心理学」の河合隼雄氏の著書ばかりというありさま。「アドラー」の名前は学生時代から知っていたのですが、本質的な理解をする機会に恵まれませんでした。昔、曾野綾子氏の『『いい人』をやめると楽になるー敬友録』（祥伝社）というのを読んだことがあるのですが、それは単なる処世術を書いたもの。

この本はそれとは違って、「明確な人生哲学」に基づいてその実践方法を書いたものです。「西洋個人主義」を徹底するとこうなるのかと大いに感銘を受けました。これを実践するのは、特に日本社会の中では難しいとは思いますが、自分自身と重ね合わせて「自分は間違っていないよ」と自己弁護しています。個人的には、2014年のナンバーワンでした。

◆映画「**永遠の0**」原作・百田尚樹

映画館での放映は2013年の12月頃だと思いますが、近所の映画館での放映が終わりに近づいた時でしたので私が見たのは2014年です。戦争という理不尽な状況下において必死に生きた人間のドラマとして秀逸だと感じました。「永遠の0」に対しては、肯定的評価と否定的評価の賛否両論があるのですが、否定的評価をしている人は、①「特攻隊を賛美している」「日本の戦争責任を問うていない」からダメと感じているか、②百田氏の考え方・人格が嫌いだからその作品も嫌いということのいずれかだと思います。

前者（①）については、どうしたらそのように感じるができるのか、私にはさっぱりわかりません。私が鈍感なのか、その方たちに先入観があって過敏過ぎるのか。後者（②）については、ある程度の理解はできますが、私自身は「作者に対する好き嫌い」と「作品の善し悪し／好き嫌い」を分

けて考えます。私自身も、百田氏の考え方／発言には同意できないところがたくさんありますが、作品の良さは全く別のことであり、エンターテインメントとして秀逸だと思います。

作品の好き嫌いと作者の好き嫌いのギャップという意味では、「永遠の0」に対する宮崎駿氏の発言はひどかったですね。宮崎駿作品は大好きですが、宮崎氏の言動に対しては「んっ？」というところも多いです。

◆購読無料－日経ビジネスオンライン

無料で配信されてくる、いろいろなコメンテーターのニュースをもとにした意見です。7年くらい前までは「日経ビジネス」を年間購読していたのですが、オンラインがあるということで登録しました。紙ベースの雑誌というのもいいところがあるのですが、目を通す部分が少なくなってきて有料はもったいないのでやめました。

日経ビジネスですから、左翼的意見を持っている人には拒否反応があるかもしれません。私が特に面白いと思うのは、何といても「小田嶋隆」氏です。完全なアル中（30歳前後？）から生還した（本人の言）らしく、右とか左とは全く無関係で風変わりな方です。誰も書かないような意見を書かれるので、いつも楽しみにしています。「河合薫」氏の意見も好感が持てます。ANAのCAから、お天気姉さんになり、その後大学院に進み、Ph.Dも取得して、今は複数の大学の講師／コメンテーターとして活躍中です。

日経ビジネスオンラインは、社会（国際問題・歴史認識問題を含む）・経済（経営・工学技術を含む）・科学（特に生命系）などの話題が中心です。ざっと目次をみて、興味のあるところだけ読んでいますが、特にこの数年は、テレビ・新聞・ネットには書かれていない「中国・韓国」に関する記事が多くて重宝しています。特に「中国の国内事情」は報道されていないことも多く、私の重要な情報源の一つになっています。

●鈴木 綾

岩波スタンプブックスシリーズからおすすめの3冊！

岩波書店のYA(10代後半～)向け翻訳小説シリーズは各国のティーンエイジャーの生きている社会背景と揺れる心模様を描いて秀逸！です。

◆『マルセロ・イン・ザ・リアルワールド』フランシスコ・X・ストーク／千葉茂樹訳（岩波書店）

マルセロは17才。5才から私立のパターソン特別支援学校に通っている高校生だ。医療的診断では「アスペルガー症候群」に近い障害があり、人間関係を築くのが難しく人混みや騒音が苦手であった手順にこだわる傾向がある。音楽と宗教に人並はずれた特別な関心を持ち、特にIM（インナーミュージック）と自分で名付けた特異な感覚をいわば白昼夢のように味わうことが大好きだ。信頼する医師に協力して脳の働きを調べられることにも納得しており、16才になってからは研究協力費としてアルバイト料も貰えるので、きちんと応えようと取り組んでいる。パターソン校のカリキュラムで自分の苦手を理解し、対処の仕方学び、自分より障害の重い子どもたちを助けることも始めている。夏

休みは大好きなポニーの世話と、乗馬療法にやってくる障害のある子どもとポニーのマッチングを手伝って過ごそうと楽しみにしていた。ところが父は、父が友人と共同経営する弁護士事務所のメールルームでアルバイトするよう求める。父はマルセロの障害を認めず、「守られた場」ではリアルな生き方はできないからと、公立高校に転校して競争の中に生きることを願っている。マルセロは父との駆け引きで、夏休みにメールルームのアルバイトをやり抜けば、秋からの高校最後の1年もパターソン校に通ってよいと言われ、ポニーとの夏休みをあきらめ、「リアル」な世界に身を置くことを承知する。しかし、それは想像をはるかに超えたシビアな世界だった。

初日、家を離れている姉が励ましの電話をくれるが、姉は、父がマルセロに友達になれと勧める共同経営者の息子（ウェンデル:ハーバード大学生）は「クソツタレ」だから近寄るなど言う。やっとたどりついたメールルームでは、責任者のジャスミンから、加給と引き換えに頼まれたからマルセロを仕方なく雇ったのだと言われる。大混乱のマルセロだが、秋からもパターソンに通うために必死で仕事をこなそうと取り組む。毒舌家のジャスミンは、マルセロの仕事への意欲と困り感を見抜き、どう指示されるとわかりやすいか、どういう仕事なら得意かをマルセロに直接聞き、仕事の段取りと日々の流れ、事務所の弁護士やその秘書たちとの関わり方を教えてくれる。一方、父おススメの「理想の友人」ウェンデルは、ジャスミンをモノにしようとして企んでマルセロを利用しようとする。ジャスミンをだませと言われていたと気づくマルセロだが、ウェンデルが俺たちは友達だと言う言葉に惑わされ、どうすればよいのか悩む。さらにゴミ箱の中に大事故に遭った少女の写真をを見つけ、衝撃を受ける。その少女は父が顧問をしている自動車会社の欠陥商品でそのような目に遭ったのだ。リアルワールドの中で「正しい」こととは何か、「信頼」とは何か、自分は何か、神はいるのか、愛とは、性とは…。答えの見えない数々の疑問に悶々とするマルセロ。しかし、彼は気づく。確かにここに自分のできることがあると…。

◆『さよならを待つふたりのために』 ジョン・グリーン作/金原瑞人・竹内茜 訳（岩波書店）

16歳のヘイゼルと17歳のオーガスは小児ガン患者のためのサポートセンターで出会った。生きることを苦痛や喪失として体感してきた二人は、いつも死を意識し、サポートセンターで自らのガン克服体験を語るグループリーダーの言葉を空疎に感じ、自分が何のために生きているのか、己に、互いに、問い続けている。ヘイゼルの愛読書は10代のガン患者が主人公の小説で、その主人公の死生観に共感するあまり、書きかけのような唐突な結末に納得がいかない。おそらく主人公が死んだのを象徴しているのだと思いながら、主人公の家族やペットのハムスターのその後が気になってならない。オーガスもヘイゼルに勧められて読んだその本にのめりこむ。二人は深く関わりあえば、「別れ」の後、相手を傷つけるのではと思いつつも互いの中に真の理解者と生きる意味を見い出していく。しかしこの本は「泣ける純愛本」などではない。親の干渉はウザいの一人では生きていけない現実に腹を立て、誰もがいつか死ぬのにわざわざ意味もない殺し合いをする愚かな大人どもに腹を立て、しかし世界にちらばる美しさに見とれ、ただただ生きていきたいと願う、実に「健全」な10代の矛盾に満ちた日々を描く。常に死に向かい合う二人が主人公だから、痛々しく壮絶な描写が続くが、それは安易な同情をはねつける。読む者に、同じくいつか死にゆく身としての自分のあり方を問い、だからこそかけがえのない出会いが生きる喜びだと気づかせる。原題「THE FAULT IN OUR

STARS」は「私たちの星回り(運命)の間違い」とでも訳すのか？この邦題はネタバレじゃないの？でも訳文はすごくいい。さすがの金原瑞人さん。アメリカではベストセラーになり、映画化もされ、日本では2015年2月～公開中。映画の邦訳タイトルは「きっと、星のせいじゃない」。(原作を壊さず、いい感じに映画化されている！)

◆『アリブランディを探して』メリーナ・マーケッタ／神戸万知 (岩波書店)

ジョセフィン・アリブランディはイタリア系オーストラリア人。典型的オーストラリア人からは「カロード」と蔑称を投げられる。しかも母さんは未婚の母。カトリック系イタリア移民コミュニティでは恥知らずな存在として目を付けられてきた。母方の祖母は祖父が死ぬまでジョセフィンを孫として認めもしなかった。成績の良いジョセフィンはお金のかかる私立高校の奨学生として常に「正しい」行いを求められる。窮屈な日々がいい加減うんざりの高校最後の年、その存在も知らなかった父親に出くわす。その上、高校対抗弁論大会で出会った公立校の「不良」に心惹かれ、ジョセフィンの毎日は手に負えなくなる。自分を縛るアレコレを投げ出したい、でも、その縛り(コミュニティ)の中でも認められたい。未婚の母として苦勞しながらも自分を大切に育ててくれた母は、これまでジョセフィンの一番大事な存在だったが、父や他の男性とデートに行く母には反発する。祖母の不幸だった結婚生活のいきさつを知り、周囲に受け入れられない恋の苦しさにも気づく。何もかもどうでもよく思えて「仲良し」の誘いを理由に、学校から求められていた責任ある役割を投げ出した後、校長からまっすぐに不心得な姿勢を叱責され、自分の愚かさ加減にとことん落ち込む。自分の進路を考え、どう生きていくべきかにも真剣に悩む。何もかも思いどおりになることなどありはしない。気に入らない校内のライバルは、先生のお気に入り、ジョセフィンの親友の幼なじみで大金持ちだ。だが、親友が孤独の中で不幸な選択をした時、何もできなかった悔しさを一番わかり合えたのは、その大嫌いなライバルとだった。

悩んでも傷ついても前向きにぶつかっていくジョセフィン。痛々しくも輝いている青春の日々。

●橋本正明

①里山資本主義を都市部へ応用するために

◆Jennifer Cockrall-King 著／白井和宏 訳『シティ・ファーマー 世界の都市で始まる食料自給革命』白水社 2014 (原著『Food and the City : Urban Agriculture and the New Food Revolution』)

◆堀越智 編著 竹内敬治／篠原真毅 著『エネルギーハーベスティング 身の周りの微小エネルギーから電気を創る“環境発電”』日刊工業新聞社 2014

私は稀に『何かに導かれて』本を手にすることがあるが、大抵それは私が追い求めていることや私自身にとって『重要な何か』であったりする。この2冊の書は初めて何気に訪れた本屋の奥まったところに2冊並んで私を待っていた。私は吸い寄せられるように、しかし迷うことなくその前に歩み立ち、その本を取った。そして私は確信した。

『この本たちこそ解答である』と。それは2冊揃わなければ解けないピース、以後どの書店で探して

も 2 冊並べられているところは無かった。

私は確信を持ってお勧めする。『この本たちこそ解答である』と。

②ミライを切り拓くのは子どもたちである

◆監督 筒井勝彦『こどもこそミライーまだ見ぬ保育の世界ー』／「こどもこそミライ」上映委員会
2013

<http://kodomokosomirai.com/>

「人を育てる」というテーマで独自の教育を行っている 3 つの保育園、毎日子供たちがその日の出来事を自分の言葉でガチ本音の話し合いをしている横浜の「りんごの木」、山梨の自然豊かな森の教育として「いのち」を慈しむ心を森の神様イコール自分の良心として良心に問いかける「森のようちえんピッコロ」、弱者をいたわる心が新しい能力を引き出す「インクルーシブ教育」を行う大阪の「保育所聖愛園」。

映画を通じ一貫して感じたことは「子供たちは大人が思っているほど子どもではない」ということだ。現代では親が子供たちの色々な局面にしゃしゃり出ている過保護的な養育が横行しているようであるが、子供たちが自分たちで考えて行動するように成長を促すことこそ本当の教育なのではないだろうか。

③負の産業革命への道となるのか

◆Andrew Kimbrell 著／福岡伸一 訳『すばらしい人間部品産業』講談社 2011 (原著『THE HUMAN BODY SHOP』)

◆Peter Warren Singer 著／小林由香利 訳『ロボット兵士の戦争』NHK出版 2010 (原著『WIRED FOR WAR』)

◆Christopher Barnatt 著／小林啓倫 訳『3D プリンターが創る未来』日経 B P 社 2013 (原著『3D PRINTING : The Next Industrial Revolution』)

21 世紀になり、科学技術が我々に与える影響は加速度的に速く、そして大きくなる傾向がある。革新的な産業技術が次々と導入されている昨今はまさに技術分野における黄金期であるとも言えよう。ただしそこには落とし穴が待っている。それは我々を幸福にする力を持っているように見えるが、同時に奈落の底に落とす力をも兼ね備えている。

一つ一つですら産業革命と評されるポテンシャルを持っているのに、ましてやこれらの技術が融合すると人類の営みは劇的に変化するだけでなく、一步誤ると倫理的破綻だけでなく人間そのものの変質を導き出してしまいうだろう。そしてそれは人類の存続をも脅かしかねないのだ。

●池澤一廣

◆社会はなぜ左と右に分かれるのか—対立を超えるための道徳心理学

[著]ジョナサン・ハイト [訳]高橋洋 [発行]紀伊國屋書店

主に「リベラル層」に向けた、自分たちが重視しない価値＝自分たちに欠けているものについて、それが何であるかを説き、それについて目を向け理解し対立する陣営との埋まらない溝をうまく埋めていく道筋を示そうとした書です。劣化した右派と劣化した左派という日本の状況にどこまで適用できるのかということは置くとしても、社会にコミットしようとする全ての人に重要な視点を提示してくれているように思います。本書の末尾の部分を引用し、紹介とします。

p485～

本書では、なぜ人々は政治や宗教をめぐって対立するのかを考察してきた。その答えは、「善人と悪人がいるから」というマニ教的なものではなく、「私たちの心は、自集団に資する正義を志向するよう設計されているから」である。直観が戦略的な思考を衝き動かす。これが私たち人間の本性だ。この事実は、自分たちとは異なる道徳マトリックス(それは通常六つの道徳基盤の異なる組み合わせで構成される)のもとで生きている人々と理解し合うことを、不可能とは言わずとも恐ろしく困難にしている。

したがって、異なる道徳マトリックスを持つ人と出会ったなら、次のことを心がけるようにしよう。即断してはならない。いくつかの共通点を見つけるか、あるいはそれ以外の方法でわずかでも信頼関係を築けるまでは、道徳の話を持ち出さないようにしよう。また、持ち出すときには、相手に対する称賛の気持ちや誠実な関心の表明を忘れないようにしよう。

ロドニー・キングが言ったように、誰もが、ここでしばらく生きていかなければならないのだから、やってみようではないか。
(引用終わり)

STAP 事件の混乱の中で読んだ 2 冊

◆背信の科学者たち—論文捏造はなぜ繰り返されるのか？

[著]ウイリアム・ブロード／ニコラス・ウェイド [訳]牧野賢治 [発行]講談社

◆統計学：R を用いた入門書

[著]Michael J.Crawley [訳]野間口謙太郎・菊池泰樹 [発行]共立出版

STAP 事件は一体どのように考えればよいのかずいぶん悩みました。そんなときに読んだ 2 冊です。「背信の科学者たち」は、データを偽りあるいは他者の業績を横取りし、いう類のことが歴史上繰り返されてきたことを教えてくれました。本書によって STAP 事件を考えるいくつかの、例えば「捏造したものはけっして自らウソをついたと認めることはない」などの基本的な視点を得ることができました。「科学」の世界が純粹で清らかな世界ではない、むしろ「科学業界」とさえ言える世界でもあることを実感しました。

「計学：R を用いた入門書」は R というソフトウェアを使った統計学の入門書です。2014 年より前に読んだものですが、STAP 事件の最中小保方晴子さんの記者会見で (STAP は)「ありま—す」を聞いたとき、本書第 1 章にあった「良い仮説、悪い仮説」という節を即座に想起し読み直しました。「きっとこれは捏造なのだろう」という思考の道筋を定める一つの契機となり、印象に残っています。

p3～

良い仮説、悪い仮説

良い仮説とは棄却 (reject) される可能性のある仮説であると最初に指摘したのは Karl Popper である。良い仮説とは反証可能な仮説であると主張した。次の2つの言明について考えてみよう。

1. その公園にはハゲタカがいる。
2. その公園にはハゲタカはいない。

どちらも本質的には同じことについて述べている。しかし、一方は反駁できるが、もう一方はできない。言明1をどのようにしたら否定できるか考えてみたらよい。まず、その公園に行って、ハゲタカを探したが、見つからなかったとしよう。これで否定できたことになるだろうか？もちろんそうではないだろう。いまいまでもハゲタカたちは、探しに来た人間を見て隠れてしまったのかもしれない。そう考えると、どんなに時間をかけて、どんなに一所懸命探したとしても、その仮説を否定することはできない。結局、「探しに行ったが、ハゲタカを見つけることはできなかった」と言えるだけである。最も重要な科学的概念の1つは証拠の非存在は非存在の証拠ではないというものである。言明2はまったく異なる。公園でハゲタカを1羽見つけただけで、その仮説を否定できる。最初のハゲタカを見つけるまでは、その仮説は正しいという前提のもとで行動するが、1羽見つけたとたんに、その仮説は明らかに誤ったものになり、それを棄却できる。

(引用終わり)

「STAP がありますー」と反証できない仮説を言い続けていけば、自分自身さえ欺くことができるということだったのでしょか。

◆高校生の演劇は素晴らしい

まだ演劇というものを観始めて間もないころ、劇作家・演出家の平田オリザさんが「人は演劇を観ないと死ぬ」と言っているのをどこかで読んだことがあります。

その時は「そんなオーバーな」と思ったのですが、今では「そうだね、死ぬよね」と思うようになりました。私にとっての演劇は、絶えず自分をとらえ返し自分を世界の中に位置づけなおすのに欠かせないものとなっています。

斯様に演劇好きですが、2014年は高校生の演劇をたくさん観ました。

2014年2月 「あひる月13」 いわき総合高校演劇部 (王子小劇場) 2013年の学校生活が題材の演劇です。2013年の自分たちを描くことで2011年3.11の地震・津波・原発事故から次に進もうとするものに見えました。(演出：いしいみちこ)

2014年7月 「翔べ!原子力ロボむつ (略称ロボむつ)」 青森中央高校演劇部 (宇都宮市文化会館) 高校演劇の大会への出場直前のリハーサルとしての公演で、栃木県内の高校演劇部を対象に公開されたものですが、一般にも公開されました。何度も全国大会に出ている強者演劇部です。公演の素晴らしさにもまして、公演後観劇した高校生たちとの質疑応答がとても楽しいものでした。(作・演出：畑澤聖悟)

2014年8月 「Future Hamlet Zombie ～平成二十六年のシェイクスピア～」 いわき総合高等学校 総合学科第11期生 卒業公演 (いわき芸術劇場アリオス) 同じくいわき総合高校のみなさんですが、演劇部に属している人も属していない人もいて演劇部の公演とはまたちがった面白さがありました。卒業したあとはそれぞれさまざまな道に進んでいるのですが、きっと演劇に助けられることがあるのだろうなと思わせてくれる素晴らしい公演でした。(演出：多田淳之介)

2014 年 8 月 「わたしの星」 劇団ままごと（三鷹芸術文化センター星のホール） 劇団ままごと 主宰柴幸男さんの作品で「わが星」という戯曲があります。「わたしの星」はその高校生版として新たに書かれたもので、出演者全て現役高校生、スタッフにも現役高校生が参加するという形でつくられたものです。とても面白かったです。（作・演出：柴幸男）

2014 年 11 月 「もしイタ ～もし高校野球の女子マネージャーが青森の「イタコ」を呼んだら」「さらば！原子力ロボむつ～愛・戦士編～」(劇団渡辺源四郎商店および青森中央高校演劇部（にしすがも創造舎） 毎年池袋芸術劇場を中心として開催されるフェスティバル東京という芸術祭の参加作品でした。「もしイタ」は 3.11 震災を題材とした青森中央高校演劇部の作品で、2012 年から現在まで無料公演を続けています。2015 年もやるかもしれません。「ロボむつ」はプロの俳優・高校生の大勢で作り上げられた作品で、さらにスケールアップした作品になっていました。（作・演出：畑澤聖悟）

高校生の作品はとてもいいです。小劇場も最近観客の平均年齢高くなっている感があります。私も平均値高めている一人なのですが、どの分野でもやはり若い人が前面に出て目立つのはいいなあと思います。高校生演劇も是非応援してください。

●網代太郎

◆松浦達也『大人の肉ドリル 家で「肉食」を極める！ 肉バカ秘蔵レシピ』マガジンハウス

食べること大好きな私とつれあいとの間で、最近では最も熱く語られた本です。肉料理のレシピ本で、従来の常識にとらわれない調理法も多く、刺激的です。本書によると、この 10 年ほど、調理の科学が飲食店の調理手法に大きな影響を及ぼすようになりました。著者は、家庭での肉料理をおいしくするために有効だと思われる論拠を学術論文や各種文献からひもとき、すべての工程を一から洗い直したレシピも多いとのこと。

私のお気に入り「超かんたんチャーシュー」。鍋に肉の重量の 8～10 倍の湯を沸かし、常温に戻した豚の塊肉を入れ、すぐにふたをして火を止める。そのまま自然に常温までさましたら、肉を取り出し調味液につける。ジューシーに仕上げるためには、60℃程度より高熱にしないこと、つまり低い温度でゆっくり加熱すべきとの理論に基づき、この方法が考え出されました。

◆瀬木比呂志『絶望の裁判所』講談社現代新書

話題になったので、読んだ方も多いと思います。著者は、最高裁勤務も経験した元エリート裁判官。日本の裁判所は大局的にみれば、きわめてよくできた「国民、市民支配のための道具、装置」であること、そして、多くの裁判官たちがそのような役割に甘んじている理由について、分析しています。裁判所の制度的欠陥等の論考にとどまらず、その欠陥の帰結である裁判所による不正行為、裁判官たちのおかしな言動等を、著者が見聞きしたままに暴露したことが、本書が話題になった一番の理由でしょう。そして、国民、市民のための司法にするためには「法曹一元制度」の実現が必要だと著者は説いています。同じ著者による新刊『ニッポンの裁判所』も、あわせて読みたい一冊です。

◆映画『アクト・オブ・キリング』

1965 年にインドネシアのスカルノ大統領が、スハルノによるクーデター未遂をきっかけに失脚した際、民間人を含む右派勢力による「共産党員狩り」によって 100 万人以上が殺されたという「9 月 30 日事件」を追ったドキュメンタリー。加害者たちは訴追されていないどころか、現在も同国はこの事件を肯定しているとのこと。オープンハイマー監督は初め、事件の被害者側へ取材しましたが、軍の妨害にあったため、加害者へ「事件についての映画を作ろう」と持ちかけました。加害者たちはとても協力的で、自分たちで演出やメイクを考え、カメラの前で嬉々として虐殺を演じます。そんな加害者であっても、撮影が進むにつれ、次第に自分の罪を意識していきます。「いかなる条件下で人は殺人をためらわないのか」「殺した側も無事では済まない」…いろいろと考えました。

●石坂信之

◆稲泉連「ドキュメント豪雨災害—そのとき人は何を見るか」岩波書店（岩波新書）2014 年 6 月

近年、豪雨がひんぱんに起きている。各地で、100 年に 1 度というような時間雨量 100 ミリを超えるような豪雨に見舞われている。昨年 8 月には広島県の土砂災害で死者 74 人、損壊家屋 430 棟の被害が起きた。時間雨量 100 ミリ超は日本のどこにでも起き、広島で起きた土砂災害は今年も日本の各地で起こりえる災害なのだ。

この本では、奈良県十津川村、和歌山県那智勝浦町の豪雨災害に取材し、実態をリアルに紹介している。さらに“首都水没への警告”という章を設け、首都のような人口密集地を水没させる災害がいつ起きてもおかしくないことを示している。

首都水没への警告の中で、葛飾区で活動する NPO の方はこう言っている。「東京の低平地について何らかの対策を考えると、難しいのは『地震だ、逃げろ』といった分かりやすい標語が使えないことです。逃げろと言っても、区内に高台がそもそもないわけですから……」。土砂災害の実態、あるいは河川より低い土地での水害がどのようなことになるのかを知っておくことは、とても大切だと思う。少なくとも、“あなたの乗っている地下鉄に鉄砲水が流れ込むとどうなるのか”、水害に気がついたときに助かるすべがあるのかを知っておくことは、とても大切だと思う。お薦めしたい本だ。

◆鎌田浩毅「京大人気講座 生き抜くための地震学」筑摩書房（ちくま新書）2013 年 3 月

西暦 2030 年代には日本列島の西半分を巨大地震が直撃することが確実、と地球科学者でもあり火山学者である著者は警告している。東日本大震災以降に書かれた地震防災の本として、まずお薦めしたい。

災害からの避難行動の多くは、避難情報を確認してから逃げましょう、というパターンになりがちだ。東日本大震災で起きた津波への対処では、とっさの出来事に経験上の状況認識ができないことにあったと私は思っている。しかしよく考えて欲しいのは、大地震や大きな水害の経験なんて、誰だってほとんどないのだ。経験不足をカバーするのは、正確な知識に裏打ちされた“状況理解”、これができるかどうかなのだ。

この本に書かれていることを自分のこととすることに依って、まさに地震災害から生き抜くことが

できる。そして、社会で減災を実現させるためには、個々人の状況理解に留まるだけでなく、社会全体で取り組まないとたいへんなことになるのだ。著者は、東京についていえば「損切り」が必要であると言っている。東京の「損切り」は首都機能の分散という処方箋だが、残念ながら、これもほとんど認識されていない。2030年代頃に起きる西日本の巨大地震では、西日本の機能不全が日本の社会全体を崩壊させ始めることになると思う。私たちが今、近い将来に起きる悲惨な日本の状況を想像できるかが重要なのだと思う。

◆リテーシュ・バトラ監督 映画「めぐり逢わせのお弁当」原題 DABBA（お弁当の意味）2013年/インド=仏=独、日本公開 2014年8月

ハリウッドを制作本数で凌いでいるというインドは、映画大国。インド映画は、歌と踊りを詰め込んで、ともかく元気に終わるというパターンが多く、ポリウッド映画とも呼ばれていた。ところが「めぐり逢わせのお弁当」は、誤って配達された弁当を通じて境遇が違う男女が心を通わせる情感豊かな映画だ。仕事一筋のサージャンが、イラのおいしい弁当を心待ちにする。夫の浮気を疑うイラの不安を、サージャンは弁当箱に添えた手紙メモによって、ユーモアに解きほぐし、亡き妻への思いを率直につづる。イラは「逢いましょう」と誘うが、イラの若さを見てサージャンは逢うのをためらってしまう。しかし……（ネタバレなのでこの辺でおしまい）

各地で改めて上映されてきたので、今後もまだ上映されるかもしれない。この「めぐり逢わせのお弁当」は、私には楽しくてお薦めしたい映画だ。

同じ頃「マダム・イン・ニューヨーク」、最近では「パルフィー！人生に唄えば」（いずれも未だ見てはいませんが）と、どうやらインド映画に新しい息吹があるようだ。インド映画にも注目して欲しいと思う。

●権上かおる

今年は、「知己の方の本」という選択をいたしました。

◆「PM2.5、危惧される健康への影響」嵯峨井勝 本の泉社

長年、大気汚染や酸性雨の大気環境調査活動を行ってきた私にとって、嵯峨井先生は、国立環境研究所の研究員でありながら、川崎公害裁判の原告側の証人に立たれたことが、最も印象に残っている。しかし、先生の第一の業績は、当時はイオウ酸化物や窒素酸化物が大気汚染物質の主流であり、粒子状物質についての注目と認識は薄かったところに浮遊粒子状物質の有害性を証明したことにある。

本書は、前半は、PM2.5についての記述であるが、後半は前述の研究過程での様々な困難が記述されている。

国に不利な内容のため、壮絶な研究妨害があった。生命の危機までもさらされながらの研究者倫理にもとずいた行動であったことが理解できる。5月9日講演会で、ぜひ先生のお話しと誠実なお人柄に直接触れてください。

◆「ものがたり機械工学史」(テクノライフ選書 1) 三輪 修三 オーム社

青山学院大学副学長をされていた頃、初めて先生のお話を伺う機会を得た。時代と地域を縦横に駆け巡るお話にすっかり魅了された。

本書は、日本機械学会の100周年事業の一環として発行されたもの。コンパクトにまとめられているため、専門外の方にも楽しく読みすすむものと思う。

ヴィトルヴィウスの建築書「築家は学問と実技の両方をわきまえることが必要……そのために文章が書け、図が描け、幾何学ができ、哲学を学び、音楽を理解し、医学や法律にも明るく……これは現代の技術者にもあてはまる言葉」 「歴史とは年代記でも単なる過去の回顧でもない。ある状況に置かれて決断と実行を迫られた人々の試行錯誤と苦闘の足跡なのだ」

という記述は、最初に先生お話のなかに具現化されていた。本書でエッセンスが味わえます。

◆「釧路炭田 炭鉱と鉄道と」 石川 孝織

発行者 釧路市立博物館友の会(釧路市春湖台1-7 釧路市立博物館内)

発行所/印刷製本 水公舎/

石川さんがまだ大学院生の時代からある学会で一緒だった。

お若いのに「石炭」が専門で、珍しいと思っていたら、釧路市の博物館の学芸員として就職された。みごとにご自身の専門を活かされておらうと思ったら、昨年このようなすばらしい本を上梓された。

丹念な聞きとりが本書の真骨頂/まるで、その場に居合わせるような臨場感ある記述/炭鉱の山本作兵衛画文集は著名であるが、これに炭鉱の危険回避など技術的な記録価値をもつ/働く鉄道の写真は類を見ないであろうと、炭鉱に興味はなくても鉄道ファンにも必見と思います。

●白井基夫

◆ジュセッペ・ヴェルディ作曲、オペラ『シモン・ボッカネグラ』公演

リッカルド・ムーティ指揮、ローマ歌劇場 5月、東京文化会館

このオペラでは頻繁に「パーチェ」「パーチェ」と歌われる。パーチェ(pace)には平和のほか、祈りの意味もあるそうだ。他国による干渉・圧力、国内の平民派と貴族派の対立、これらに翻弄される人々。

ヴェルディのオペラではいまいばん好きかもしれないこの作品が、ムーティの指揮で体験できた幸せ。序曲の冒頭からジェノヴァの海が見えた(実際に見たことはないのだが)。ムーティが紡ぎ出す音の広がりや繊細さ。夢のような時間だった。期待のソプラノ、バルバラ・フリットリはキャンセルだったが、テノールのフランチェスコ・メーリの美声に酔った(声に酔う、というのは本当だった)。ムーティはその後、ローマ歌劇場の名誉指揮者を辞任してしまったし、安倍晋三は「国民のものである憲法」における集団的自衛権を閣議決定で「勝手に容認」したタイミングでもある。一生忘れない公演。

◆リッカルド・ムーティ＝著、田口道子＝訳

『リッカルド・ムーティ、イタリアの心 ヴェルディを語る』(音楽之友社、2014 年)

以前、テレビで、ムーティによるヴェルディ『レクイエム』のリハーサルを見た。「そうじゃない。南イタリアでは神様にお願いするのではない。こんなに祈っているのに、どうして望みどおりにしてくれないのかと、神様に求めるんだ！」というような説明をしていた。そのムーティがどんなふうにして人生（それは、ほとんどヴェルディに等しいかもしれない）と向き合ってきたか、俄然、強い関心を持つようになった。

ムーティは、もしもヴェルディに会うことができたらこう言うそうだと。

「音楽家人生において、あなたをずっと愛してきました。あなたに仕え、役立つよう努めてきました。でも、それが正しかったか間違っていたかは言わないでください」。そして「なぜなら」と続ける（あとは読んでのお楽しみ）。

音楽は、「好き／嫌い」とか「すばらしい／よくない」とかでは決められないところにあるのだった。ヴェルディの音楽作品にふれるたび、ページをめくる必要がある。「芸術家というよりは音楽に身を捧げる職人」が書いたのだから、なおさらいいに、心して読まねばならない。そして、聴かねばならない。

「音楽の神髄」に近づけた気がする。

◆ユーリー・ボリソフ＝著、宮澤淳一＝訳

『リヒテルは語る』(ちくま学芸文庫、2014 年)

これには驚いた。ある意味、トンデモ本。名ピアニストのリヒテルの頭の中は、想像を絶する連想・空想・妄想の世界であふれていたのだった。

「私の夢は自分で弾く曲と直接に関係がある。これまでずっと生きてきて、弾いた曲の数だけ夢を覚えている」に続けて「ラフマニノフの《絵画的練習曲集》と格闘していた時、鐘を呑み込む夢を見た。その夢には調性すらあった。ハ短調だ(192 ページ)、なんてのは序の口。それぞれの曲と、さまざまなイメージ、記憶が紐づき、知識量の膨大さともあいまって、とんでもない世界が現出。これが音楽の本に分類されてしまうのはなあ……なんてさえ思ってしまった。

これを買って何カ月かのち、リヒテル&ロストロポーヴィチによるベートーヴェンのチェロ・ソナタ集の DVD を安い値段で入手できた。これがまた、すさまじい気迫みなぎる演奏。1964 年、二人とも若かった。

●桑垣 豊

◆「総特集 ピケティ『21 世紀の資本』を読む』『現代思想』2015 年 1 月臨時増刊号 青山 2014 年

ピケティの『21 世紀の資本』が話題になっているが、はたして読む価値はあるのか。あれば『21 世紀の資本』自体を紹介するよ。批判点も書いてある雑誌の特集を読んだほうがいい。

まず、ピケティの研究で価値があるのは、格差の拡大を税務統計などから広く裏付けたことである。欠点は、なぜ格差が拡大したかの原因分析が表面的であること、実務的に不可能な累進富裕税を主張

していること。

ピケティの有名な「法則」に、国民所得増加率よりも資本収益率が高い ($r > g$) というのがある。(理科系の人間はこのようなものを法則とは呼ばない。)しかし、そうなると消費が減るので成長自体が減速し、やがて止まってしまうはず。なのに資本収益率が高いのは、株や土地などがバブルで値が高くなるからである。高い株を先に売った人は、価値の安定した貨幣や債権に変えることができるが、後追いで値が下がってしまう。高値で安定しているときは、株主は全員その価格の資産をもっていると錯覚できるので、その合計は大幅に水増しとなる。その水増しの夢が冷めないように、ごまかす装置として1990年頃から複雑怪奇な金融システムを作り出した。

累進富裕税は可能ならそれに越したことはないが、実務的に不可能である。ピケティは政治的に難しいかもしれないが、不可能ではないと言う。所得の把握でも相当むずかしいが、資産となるとなおさらである。マイナンバー制度で把握できるというのも幻想である。対案はあるのか。私が注目しているのは、貯蓄税である。貯蓄額に対して定率で税を取る。低所得者は貯蓄率が低いので、おのずと累進課税になる。そもそも累進にするには、ばらばらの口座を同じ人のものであることを特定(名寄せ)しないと累進にはできない。定率だと名義を区別しないであらゆる金融機関の口座を対象にすれば簡単であり、現に利子課税を実施している。匿名で税が取れるので管理社会にならない。現金でもっている人はすでに脱税のためにすでに現金にしているから同じこと。それに日本には、個人法人ふくめて2500兆円の貯蓄があるので、0.1%の税率で2.5兆円にもなる。

ところで、日本では20世紀末から、法人貯蓄(法人内部留保)が先進国で唯一借入金を超えて黒字(単年度)になっている。ピケティは、法人貯蓄のことにふれていない。実は、アメリカもヨーロッパも法人の所得隠しが表に出れば、実はトータルでも黒字なのではないか。枠組みが古いゆえに、ピケティの著作を私は『「20世紀」の資本』とよんでいる。

では、「21世紀」の資本について、私が1つだけ大事な点を指摘しよう。21世紀にはいって、製造設備の生産性がより高まった結果、同じ資金で用意した設備でより多くのものが生産できるようになった。必需品の需要が一巡した先進国では、必要投資額に対して、資金があまりぎみである。だから、市場原理に従って利子も資本収益性も低くなるはずである。ところが日本以外の先進国の資本収益性は高いままであり、それがバブルを繰り返す原因となっている。実物投資ではもうからないないので、株や土地など金融バブルに頼るからである。

つまり、資本の希少性がなくなったので、資本家がもうからなくても当然なのに、無理をしている。それを正当化しているのは、経済学である。主流派経済学には、「効率的市場仮説」という理論がある。これは株価は常に実態を正確に反映しているという理論であり、ノーベル経済学賞(2013年:ファーマ)をとったりしている。不可解なことに、同じ年にファーマの理論を否定しているシラーも受賞している。ちなみにノーベル経済学賞は、正確にはスウェーデン王立銀行が、ノーベル賞のシステムを横から利用しているだけである。

日本は幸いなことに、利子も資本収益率も低く正常なほうである。だれも「ノーベル経済学賞」を受賞していない。名誉なことである。

◆『太平のしくみ 江戸の行政と社会』藤田覚 岩波書店 2012 年

武士の支配といういい方があるが、江戸時代が安定するにつれて、官僚化した武士による実務行政という色合いが強くなるという。幕府や各大家の統治目的は、領民の生活をよくするという規範が一般的になった。だから、お殿様にふさわしくないと「主君押し込め」と言って、家老たちが殿様を部屋に閉じ込め、時に交替させるのが普通であった。明治維新政府は、前政権をことさら悪く言うことによって、正当性を主張するために歴史を捏造した。今もその捏造はつづいている。

武士とそれ以外の格差はあったが、同時代の世界各国と比べるとかなり少ない。もちろん、西洋より遅れている面も多々あった。歴史に法則は立てないと歴史学者は言ってきたが「あらゆる面で日本は西洋より遅れているはず」という法則があるようで、20 世紀末までは実証抜きで信じていた。

◆『旧石器が語る「砂原遺跡」 遙かなる人類の足跡をもとめて』山陰文化ライブラリー

松藤和人、成瀬敏郎 ハーベスト出版 2014 年

遺跡捏造事件以来、考古学は慎重になりすぎて、4 万年以上前の日本列島に人類は存在しないことになっていた。それを慎重な発掘により、くつがえした研究者の著書である。場所は島根県西部。近くの三瓶山などの火山灰などから、10 万年以上前の人類の使った遺跡であることが判明した。ただし、多くの考古学者は疑っている。それは、日本には 4 万年前以後の旧石器時代の石器を研究している人は多いが、それ以前の石器を中国や朝鮮半島で見た研究者が少ないことが原因である。

砂原遺跡で暮らしていた人類は、現生人類ではない。15～18 万年前の氷河期に大陸から歩いて渡って来た人類の子孫である。2 人の研究者が既存の学会から、理不尽な対応をされるどころなど、学問の実態がかいまみえる。ちなみにこの本は、地方出版なので手に入りにくい。値段が 2 倍の 3000 円するが、同じ著者による本にも砂原遺跡のことが出ている。松藤和人著『日本列島人類史の起源－「旧石器の狩人」たちの挑戦と葛藤－』雄山閣 2014 年。

●林衛

◆フランス ドゥ・ヴァール『道徳性の起源－ボノボが教えてくれること』紀伊國屋書店 (2014)

http://www.amazon.co.jp/dp/4314011254/ref=cm_sw_r_tw_dp_Wq6Oub011QD44

個体同士の協力や共感人間だけではなく、霊長類、哺乳類を中心に広くみられる。宗教の成立以前の人類進化のなかで、それらが適応的にはたらいたからこそ、現生人類の「繁栄」がもたらされた。この観点からボノボの研究者である著者は、個別の人類集団の文化や宗教のよしあしではなく、人間がヒトであるという事実に道徳性の起源をみいだそうとする。進化の初期段階に形づくられたものであれば、そこには普遍性、共通性がみいだせるかもしれない。ここに、民主主義や正義を語る私たち自身の道徳性の起源＝動物（ヒト）としてできることに何を積み上げようとしているのか、考えるきっかけにしたいと期待をいただいた。

いっぽう、道徳の起源に普遍性、共通性があったとして、それを現代社会の中でどのようにいかしたらよいのだろうか。人類は長い長い時代、個体同志が共通の利害によって結びつけられていた小集団によって厳しい自然環境への適応をはたしてき。そのような進化的背景と現代の人類おかれた状況

とは大きく様変わりしているのもまちがいない。多様な利害の異なる複数の集団に個体が属し、個体レベルでも多様な集団間でも輻輳する多様な適応、利害が生じていると考えられるからだ。

学校で生じている集団いじめは、思春期の同年代が集められ管理され競争を強いられるという人類進化のなかにおいても特殊な空間なかで、道徳性が抑制され、攻撃性が上回って生じているのではない。しかも、なぜこの攻撃性は弱いものに対して集中するのだろうか。協力しあう性質をもっているはずの人類であるはずなのに、原発震災後の被曝支援不足、大川小検証で生じている問題（分断、権利侵害など）も、狭い範囲の利害に対する共感や協力という進化的適応の結果であり、起源的な道徳性の限界（あやまちすらおかしうる）を示しているのだろう。だからこそ、ヒトとしての人類の性質の探究は忘れてはならない。

◆名嘉憲夫『領土問題から「国境画定問題」へ—紛争解決論の視点から考える尖閣・竹島・北方四島
明石選書（2013）

http://www.amazon.co.jp/dp/4750338400/ref=cm_sw_r_tw_dp_ct6Oub1F2E35W

日清、日露戦争のどさくさに紛れて日本政府が一方的に編入を宣言。サンフランシスコ講和条約の「単独講和」の結果、国境策定があいまいなまま放置されている歴史的事実。その考察抜きの「固有の領土」論のよろさ、危うさを、政治社会学、紛争解決学の立場から論証した選書。領土問題に関心のある人には必読。

どの国の「固有の領土」なのかという問題はみかけ上の争点にすぎない。国民国家形成によって領土と国民が国境と国籍によって切り分けられるよりも前の時代の国家では、中央に位置する政権の権力構造から離れた辺境ほど、その土地を利用する人々の意識は中心の政権（国家）から離れたものであった。より大事な問題、すなわちほんとうの論点は、いかに両国間で友好関係を築けばよいのか、そのためにどのように国境を定めればよいのか、にあるのだ。

ちなみに、紹介者は、2014年12月にドイツを訪問、大ドイツ主義の帰結、破綻、戦争加害の歴史を、経済発展、革命、民主化、挫折の繰り返しの歴史とあわせて考察するドイツの経験を垣間見た気がした。ベルリンの国会議事堂裏にあるジプシー虐殺のメモリアル、各国大使館が並ぶブランデンブルグ門広場前のナチ時代の写真パネル、ホロコーストメモリアルは、日本でいえば皇居前広場あたりに日本のアジア侵略の歴史を物語る戦争博物館があるようなものだといえる。

ドイツ訪問では、ハンブルグのミニチュアワンダーランドの展示にも目を奪われた。

<http://www.miniatur-wunderland.com/mobil/diorama/history-civilization/>

http://twilog.org/SciCom_hayashi/date-141203

ミニチュアワンダーランドは、日本でいえば東武ワールドスクエアをパワーアップしたような人気娯楽施設なのだが、そこで文明や民主主義の歴史が語られているのだ。当然のこと、ドイツ革命や民主化の歴史に続き、民主的な憲法をもっていたはずのドイツワイマル共和国の時代にヒトラー政権を生んでしまった教訓が表現されている。

http://twilog.org/SciCom_hayashi/date-141206

日本であれば、それに変わる歴史の語りとは、戦国時代とか明治維新による戦争そのもの、あるいは武力を背景とした政権委譲であることしばしばだ。

敗戦によって領土を失ったドイツは、大ドイツ主義も捨て、その代わりに、フランス領となったアルザス・ロレーヌの資源を共同利用するヨーロッパ石炭鉄鋼同盟を提案し、国際社会で名誉ある地位を維持し、新しい平和への貢献をめざした。

戦後 70 年を経て、日本はまだ戦後処理すら終わられていない。しかし、その問題の全体像を把握していこうとする学問的知恵は存在しているのだとの思いを、この選書で新たにした。

◆五島綾子『〈科学ブーム〉の構造-科学技術が神話を生みだすとき みすず書房 (2014)

http://www.amazon.co.jp/dp/4622078406/ref=cm_sw_r_tw_dp_Ut6Oub0Q2D0HJ

著者五島氏自身によるその要約ともいえる論考（【提案】「ナノブーム」とは何だったのか）が『化学』2015年2月号に掲載されている。

1960年代 DDT と最近のナノテクの二つを事例にブームの外側と内側を歴史的に検討する必要性、有効性を説得的に示した本。原発問題、地震予知、再生医療・STAP 問題を考えるためのヒントにあふれている。

政府、官僚、財界（電力会社）、（御用）学者、広告や権威情報に縛られたマスメディアによる原子力カムラのペンタゴン、そこに司法を加えたヘキサゴンが原発震災の警鐘を葬り、原発「安全神話」を振りまいてきたと、2011年3月の東日本大震災・原発震災のあと、盛んに語られるようになった。これは、最大の〈科学ブーム〉が招いた最悪級の結果を直観したからだといえよう。

紹介者は、上でブームの外側と内側と書いたが、ここで内側とは科学の研究や開発の場での具体的な進展、期待感の高まりのことだ。仮説の検証、アイデアの実現をめざして研究、開発が進んでいく。それがその外側を巻き込んだときに、あるいは外側から煽られたときに〈科学ブーム〉が生じるのだ。ひとたびブームがまきおこると、検証や実現が困難な仮説やアイデアであっても、大きな予算のもとに探究の対象となりうる。バスに乗り遅れまいと多くの人、組織がこぞり、研究費、開発予算はブームを軸に分配されるようになる。

具体的な問題点に気づきやすい位置にいる研究者たちであっても、壮大な研究に対して水を差すような批判を控え、研究費の分配で自分やまわりの研究者の足を引っ張らないようにするために、実現可能性やデメリットなどのネガティブな側面が語られなくなっていくのだ。もちろん、ブームのなかでも地道な研究によって進展していく内容もあるだが、それはしばしばブーム全体のための広告塔として使われる。ノーベル賞を受賞しようものならば、その研究者はたちまち神格化される。

日本の再生医療は、まさにいま巨大なブームのまっただなかにあるといえよう。STAP 細胞事件も、ほとんど批判が語られず、煽られながらブームをもち立てようとする新たなペンタゴンによる〈科学ブーム〉がもたらした、期待のかたち、神話の語りだったのではないか。この問題については、別に論じたい。

●秋山和男

私は、10代の若者たちにおすすめることを意図して書きます。

市民科学研究室のホームページに多くの若者がアクセスし、その活動と情報や、情報に登場する他の団体・研究会の活動などから、現代社会の科学的な分野の課題を受け取り、今後自分が組みたい課題の種をいくつも心に育て、上級学校に進み学んで欲しいのです。

◆柳田邦男「一市民の立場から」『健康・医療から考える公共性（公共哲学 19）』（市野川容孝・金泰昌編、東京大学出版会 2006）、

関連して「子宮頸がんワクチンの副反応」について

『健康・医療から考える公共性（公共哲学 19）』でいう「公共哲学」とは対話・共働・開新の哲学であり、「専門知」と「生活知」をむすび・つなぎ・いかす「知」であると説明している（308-310 頁）。これは、市民科学研究室の役割に通じると考えます。さて、柳田邦男氏は（生と死の人称性）で、死には1・2・3人称の死があると。1人称の死とは「私の死」で、どのような死を迎えるかという死生観やリビング・ウィルの問題が重要な要素になる。2人称の死は愛する家族や恋人など身近な人の死で、死に至るまでどのようなケアや介護が、また人生の最期を意義深いものにするための支援などが、重要な課題になる。3人称の死は、知人からあかの他人まで幅の広い人の死である。この3人称の死の中で、やや濃密な関係をもつ患者・利用者・障がい者に対し、医療者や福祉関連の専門家はどうかあるべきなのか。この死の人称性の気づきは生命や生きていることの人称性にも跳ね返ってくると柳田氏はいっている（325-332 頁）。そして、柳田邦男氏は、専門家に（2.5 人称の視点）を求める。専門家として客観的・冷静・科学的な3人称の視点と役目も果たしながら、2人称の立場つまり患者・利用者や家族に寄り添う視点も求めている。

具体的な例「子宮頸がんワクチンの副反応の問題」で、この「2.5 人称の視点」を考える。

日本では 2013.5 月から 7 月にかけて、副反応について新聞等に多くの報道があった。

厚生労働省は同年 6 月 14 日付けで、予防接種・ワクチン分科会副反応検討部会等が「同副反応の発生頻度等がより明らかになり国民に適切な情報提供ができるまでの間、定期接種を積極的に勧奨すべきではない」と、定期接種の対応について勧告を出した。その後 2014 年 7 月 16 日に厚生労働省は「ヒトパピローマウイルス（HPV）感染症の定期接種に関するリーフレット」を出した。接種を受ける対象者に対して『ききめ』と『起こるかもしれない体の変化』の両方をちゃんと知りましょうと題して、その両方の情報、「ききめについて」は 6 行で記載し、体の変化についてはリーフレット 1 枚の多くをさいているが、肝心の「痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について」は、「これらの原因は現在調べているところですが、その報告頻度は 5 万接種に 1 回であり、ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方はこれらの症状が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください」とある。

副反応検討部会等の専門家も適切な情報が出せないのに、一般市民（相談された街の医師）はどのように判断したらよいのだろうか。一方、手元の「子宮頸がん検診を受けましょう」というリーフレット（横浜市の某区発行）には、予防に関してワクチンとの関係は書かれていない。検診の意義も「H

PVに感染しても、免疫によりほとんどの感染は自然に排除されます。しかし、HPVが排除されずに感染が続く場合があり、その一部にがんが発症します」「そのために定期的ながん検診が大切」とある。

『子宮頸がんはみんなで予防できる』（今野良監修知覧俊郎、望月聡子著 2009）の記述は、検診で子宮頸がん予防ができると中学生でも理解できると考える。「子宮頸がんの場合、がんが子宮頸部の上皮内にとどまっている状態（0期）および上皮をこえて浸潤するものの、その大きさが3ミリ以内の状態（I a 1期）ならば、転移はありません。したがって、頸部のみを切除する方法である子宮頸部円錐切除術という小さな手術で治療が可能です。とくに、これから妊娠・出産を希望する方には、この方法が選択されます」（20-22頁）。もちろん、HPVの一過性感染が多い30歳程度より若い女性の、偽陽性の問題については受診者への配慮は必要である。

柳田邦男氏のいう、専門家に「2.5人称の視点」があれば、副反応検討部会等があのような勧告をしたか。結果がでるまで接種を中止し、さらに検診しやすい方法の工夫を示し、リーフレットの内容も変えるだろう。子宮頸がんワクチン・検査に限らず、今日のような社会的な課題・問題解決には複眼思考が求められる。「2.5人称の視点」とは「複眼思考」であり、「その事態を自分自身とのかかわりの中でとらえ直す複数の視点をもつ」複眼思考の具体的な方法でもあるのだ（『知的複眼思考法』荻谷剛彦著 1996 17頁）。

◆『戦後日本公害史論』（宮本憲一著、岩波書店 2014）

関連して、『科学ブームの構造——科学技術が神話を生みだすとき』（五島綾子著、みすず書房 2014）

この2冊の本から、公害やDDTの問題への専門家や市民たちの取組み、解決への歩み、その教訓を学んだ。問題解決のための新たな学問の誕生も知った。

1960年東駿河湾にアラビア石油、住友化学、東電等基幹4社の石油コンビナート計画が持ち上がる。ここから、三島・沼津の市民運動が起こり、最終的に計画を撤退させた。

その運動の特徴は「市民運動の主体は労働者、漁民、医師、主婦と多様で、……この運動は学習会を共通の方法にした科学による公害予防闘争であった。多くの住民運動は被害が生じてから始まり、しかも感性的な方法を取るために、被害者以外の住民に同情はあっても共感を与えず困難を招くのに対し、この運動は予防運動であった。このため、どうしても住民が公害の実態や原因を科学によって予測しなければならなかった」（168-181頁）。この学習会の方法が「三島・沼津市民運動の教訓」としてまとめられている。

2つ目は、1969年に大阪空港周辺住民の騒音公害裁判が始まる。1975年控訴審で原告全面勝訴。午後9時以降午前7時まで航空機の離発着禁止とした。ここでは、「公共性」について、空港の公共性は「多数の住民に重大な被害を及ぼし、被害に対する適切な措置をとらないまま経過し、……なお被害の発生を継続しつつ公共性を主張することには限度がある」と断定した（362頁）。ところが、1978年最高裁での審理開始、第一小法廷で審理されていたが、国は法務省訴訟局を通じて、大法廷での審理を要望。最高裁裁判官は小法廷の結審後にもかかわらず、……突如大法廷へ審理を移す」（364頁）。結果、差止めは却下。判決は9対4の多数決で決定した。審理を大法廷へ移したのは「騒音以外でも公共施設、公共事業による生活妨害、環境変化等につき、人格権、環境権を主張して、……建設、実

施等の差止め、利用の制限及び損害賠償等を求める訴訟が多発している」ことから、今後「重大な問題が生ずることを国（行政当局）は恐れた」（365 頁）からであった。この裁判の結果で「司法権が行政による犠牲に有効なチェック機能を果たさ」なくなると大阪国際空港公害裁判の研究者沢井裕氏はいった（372 頁）。つまり、公害問題を解決する手立てとしての、裁判による方法がここから変化してくる。1971 年国道 43 号線・阪神高速道路公害裁判開始。

これらの訴訟は健康障害から生活環境の破壊の問題も加わり、政府等がいう公共事業・公共施設の公共性と、それと対立している環境の公共性のあり方が問われ、裁判を通じて日本でも「公共性」の学問研究が行われるようになった（341-344 頁）。

一方『〈科学ブーム〉の構造』では、DDT の使用禁止に至る過程の記述で、特に次のことが印象に残っている。1962 年カーソンの『沈黙の春』が出版され、同年ケネディ大統領がこの本を知り、科学顧問団に殺虫剤について調査・検討させた。結果ケネディレポートを発表。殺虫剤の安全性の管理が行政、化学産業に求められることになった。その結果 DDT 支持派、不支持派の専門家たちの和解が生まれグローバルな観点にたった公共的利益をめざす活動が生まれる（85-87 頁）。化学物質をどのように管理していくかが課題となり、リスク概念はそのような時期に生まれた（91 頁）。

社会に生じた新たな問題を解決するために新たな学問が生まれてくる。10 代の若者たち、君たちがある社会的な課題に挑戦し、研究・行動・解決していく道程で、今までにない方法や学問が生まれる。日本では政府は経済成長主義で開発を進めるために公害防止や環境保全は後回しにしてきた。DDT の生産と消費は軍産学複合体と産業界が、DDT の科学的効果と経済性を強調し、公衆衛生局（PHS）等を動かし、DDT に対する信頼感を市民に与えた（58 頁）。

2014 年の日本社会の雰囲気は、メディアの不十分な報道も手伝って経済成長だけを唱えている姿が目につく。私は、身近な人たちに「違う違う」とひたすら言い続けている。

◆『発達障害の原因と発症メカニズム——脳神経科学からみた予防、治療・療育の可能性』（黒田洋一郎、木村・黒田純子著、河出書房新社 2014）

市民研からの電子メールでこの著者とつながった。2014 年 7 月に東京理科大学公開セミナー「環境と次世代健康科学」の案内が市民研の ML 会員に送られてきた。上田昌文、梅澤雅和氏と、黒田洋一郎氏の「自閉症、ADHD など発達障害の原因と予防—PCB、農薬など環境化学物質の危険性」の発表の案内であった。

この本は、「遺伝と環境が相互作用した遺伝子発現による脳の機能発達」から書き始め、「自閉症関連遺伝子は 2013 年 12 月末に 588 の遺伝子があげられてい」て（133 頁）、その関連遺伝子を、「シナプス関連因子 20、神経伝達・ホルモン関連因子 21、細胞内シグナル伝達・代謝系因子 7、エピジェネティック・転写調節因子 8 つ」、具体的な遺伝子名を掲げている（134-135 頁）。そして、高次機能の神経回路では、長い軸索で繋がれた距離的に遠いシナプスが遺伝的により脆弱である。とりわけ外来の化学物質で異常がおこりやすい（200 頁）。「自閉症など発達障害の原因は、従来言われてきたような『遺伝要因』では説明がつかず」、環境要因もある。「ことに感受性の高い胎児期や小児期などに農薬や PCB などの有害な環境化学物質を曝露すると発達障害のリスクが高くなる」。環境要因は、環境化学物質・放射能・感染症・栄養状態・生活習慣・さらに家庭・学校・社会環境の著しい変化など

も関わり、これらが複雑に影響し合った相互作用の結果の発症と考えられる。2012 年、米国小児科学会は『子どもへの農薬曝露による発達障害や脳腫瘍のリスク』について正式声明を出し農薬曝露の危険性を警告した (241 頁)。

ここまで読み進めてきて、次のことばに得心する。「発達障害のようなエピジェネティックな病気や障害では、脆弱性を決めている遺伝子背景そのものを変えることはできない。ことに症状の個人差が大きく数百以上の遺伝子の組み合わせが関与している。”超”多因子遺伝であることが判明している自閉症では、遺伝子背景を変えることは不可能といえる。それに対して、原因のうち環境要因の部分は、原理的にはすべて予防可能である。『環境は変えることができる』からだ (266 頁)。

市民(とりわけ親たち)が自分たちでできる発達障害の予防に向けた一つの知識を与えてくれたものである。今回の作品群を学ぶなか、並行してトキシコロジー(毒性学)を学び始めた。中高校生が我が身を守るために、食べ物から薬、化学物質、さらに公害・環境問題に至るまで、トキシコロジーの基本的な知識を得るべきだと痛感した。(文章中のアンダーラインは引用者がつけた)。

●上田昌文

2014 年に読んだり観たり聴いたりしたものから 3 つを選ぶのは、ほんとに難しい。おすすめしたいものはたくさんあるから、ということもあるが、「ここですすめたものをほんとに手にとってもらえるのだろうか(買わないまでも)」と考えると、「安くて」「役立って」「面白くて」……と条件が揃わないことには叶わないだろう、という気がする。例えば私が 2014 年に偶然古書店で安く手に入れた、『SCULPTURE From the Renaissance to the Present Day vol.1,2』(1991 年 TASCHEN 刊 全 1149 ページ)は有名彫刻作品を網羅した素晴らしい写真集なのだが、普通に買うには高価過ぎるし、図書館にも置いているところは少ない。評論家として現在大いに健筆を振っている片山杜秀氏が、1991 年から 2002 年に雑誌『SPA!』に連載したコラム「ヤブを覗む」を 1 冊にまとめた『ゴジラと日の丸』(文藝春秋 2010 年)は、映画や演劇や音楽から日本伝統芸能やサブカルチャーまで目配りしての政治時評エッセーで、軽やかな批評精神が横溢した無類に面白い書物だが、なかなかのボリュームで値段も(エッセーにしては?)結構する。……こんな具合にそぎ落としていくと、「思いっきり実用的」か「すぐ読めるけど、インパクトが強い」か、といった路線で選ぶことになる。まあ、必ずしもこんな基準にこだわることはないのだが、今回はこれで行ってみる。

◆TANICA ヨーグルトメーカー「ヨーグルティア」

2014 年実用のイチオシはこれである。

私は 30 歳頃からほぼ毎日ヨーグルトを食べてきたが、この機器を買ったおかげで、その「ほぼ毎日」の「ほぼ」がとれた。カスピ海ヨーグルトが好みなので、それを毎日、そして米麹を使った甘酒も頻繁に、という具合になった。「ヨーグルティア」は台所でフル稼働している。市民科学研究室の「子ども料理科学教」の「発酵」の授業でも活躍することになるだろう。このように簡単、手軽、電気代も低コストで誰にとっても役に立つ品は、大いに健康増進に寄与するものではないだろうか(そのことをデータで調べる術はないものの)。開発者を表彰してあげたいくらいだ。

◆『ニッポン景観論』(アレックス・カー/集英社新書ヴィジュアル版 2014年)

字だけ読むのなら電車の片道1時間で読める本。しかし、そのインパクトは強いはず。

海外に出かけてどんな日本人も直ちに気づくのが、街の中に電線・電柱・看板がとても少ないことだ。なぜ日本では、景観を破壊する醜悪な建築がそこそこに立ち並び、山肌や岸辺や川辺りがコンクリートで塗り固められ、道路がアスファルトで覆い尽くされるのか。ちょっと考えてみれば、とんでもない横暴だとわかる工事が、なぜまかり通ってしまうのか。住民はどうして声をあげないのか。土建国家の成れの果ての姿が、この本では、皮肉を込めたパロディの写真も交えて、紹介されている。貴重な観光資源であり、住民の結びつきの源泉となる文化資源でもある「景観」が、いとも簡単に失われていくことへの抗議の書でもある。10年ほど前に読んだ、同著者の『犬と鬼』(講談社 2002年)も同じ趣旨からの日本の行政システムの分析・批判だったが、10年経っても日本はほとんど変わっていないことを突きつけられるようで、辛い。

バブル期の経済の狂奔の余波が残っている時期に、日本にどんなに奇妙で醜いスポットがあちこちに出現していたかは、今は絶版になってしまっている、矢作俊彦『新ニッポン百景』『新ニッポン百景 95-97』(小学館 1995,1998)の強烈な写真たちが教えてくれる。副題に曰く「衣食足りても知り得ぬ「礼節」への道標として」。

もういい加減、景観を破壊することは本当に罪深いことなのだ、と私たちは思い知らねばならないのではないかな。

◆小型スピーカー「CASTRON MP-01」

2014年は私の音楽生活にとって一つの大きな節目の年になった。

20年来愛用していた高級なプリメインアンプが突然壊れ、下取りを余儀なくされたことがきっかけになって、約半年をかけてオーディオ機器類を総取っ替えした。少し前からはじめていた、CDやMDの音楽データをPCに移行するという作業も延々続きそうだったので、いわゆる“PCオーディオ”に軸を移すことにした。ここで「おすすめ」として扱うのは、PCオーディオを含め、どんなシステムを組むにしても、音の良し悪しを決める最大の要素であるスピーカーについて、である。

「良い音」とは何か。人によって意見が違うこともあるだろうが、良い音が生理的な快感を高め、音楽の味わいを深くすることは誰にとっても共通だと思われる。どんなに疲れていたり、精神的にへこんでいたりしていても、楽器や人声の目の覚めるような生々しい音にふれると、まるで淀んでいた血流が勢いを取り戻して一気に全身を駆け巡るかのごとく、生気が蘇ってくる。これにはきっと、音楽に込められている文化という大きな文脈の中に自分がいるということ、刺激と記憶が絡まった感覚と精神の生理的なメカニズム、まさにその記憶を自身に埋め込んできた自分のこれまでの習慣……といった複雑な事象が関係しているのだろう。そして、同じ曲をいったん「良い音」で聴くと、それまで聴いていた音が「イマイチの音」に聞こえてしまって、もうもとは戻れない—そのような贅沢な仕組みが私たちの「感覚」に埋め込まれているようでもある。そのため、「良い音」をテクノロジーで実現しようとする試みは常に何かしらの支持を得て、商業的成功の可能性を持つことになる。

一方で、再生音に限って言うと、「よい音」の一番の基準は「原音再生」であろうから、音再生のテ

クノロジーはそれに向かって進化することになる。しかし「原音再生」は実際は実現不可能な理想であり、現時点での限界の中で、人工的な色付けによってそれを補うことになる。「まるで真横で演奏されているような空気感」「奥行きのある立体感」「無音部分での完全な静寂」……いわば人の耳をいかに上手に騙して、心地よく、「原音」に近いと思わせる音を再生するか、である。プレーヤーにしろアンプにしろほとんどのオーディオ装置が、その最上位ランクにおいては、こうした“騙し”はほぼ完成レベルに達していると思えるのに、唯一、「まだこの上がある」「改良の余地がある」「新機軸が打ち出せるかもしれない」と思わせるのが、スピーカーであろう。装置の値段もピンからキリまであり、高いものだと余裕で一軒の家が買えそうなものまでであるという、奇矯な相場になっている。

できるだけお金をかけずに「良い音」を、というのが PC オーディオの眼目の一つであるべきで、私の経験から言うと、スピーカー以外は、PC 本体（ここに CD などのデータを取り込むので、それを可能にする再生ソフトが必要）、ヘッドフォンアンプが内蔵された（つまり、その出力端子が付いた）USB・DAC、少し高級なヘッドフォンの 3 点セットに、10 万円もかければ、いまの技術では驚くほど「良い音」がヘッドフォンで堪能できる（いわゆる“ハイレゾ”もこうした枠に入る）。問題はスピーカーで、こればかりは 100 万円を出したとしてもハズレることがある。本体の大きさは小型に留めて（場合によっては置く場所は机の上）、ものすごく大きな音を出しはしないで、そしてフルオーケストラが出すような重低音までをもカバーするという難しいリクエストも掲げない、という条件内であれば、比較的低価格でも可能性はある。それでも 10 万円前後で選択するとすると、私が試聴した範囲では、自信をもっておすすめできるのはごく限られてくるように思われる。ここでおすすめするのは、異色中の異色と言うべき、国産のスピーカーだ。なんとこれを作ったのはジンギスカン鍋やすき焼き鍋で使う鋳鉄のメーカーである（北海道旭川市にある「臼井鋳鉄工業株式会社」）。このスピーカー「[CASTRON MP-01](#)」は 2 台ペアで定価 15 万円。決して安くはないが、鳴らしてみると、高級ヘッドフォンで聴き取れる生々しさやくっきりした輪郭をほぼ保ったまま、音が見事に空間に広がる。筐体が継ぎ目のない鋳鉄でできているため、小型（高さ 25cm）なのに 1 つの重量は 6kg とかなり重い。机の上に置くときでもこれなら許容範囲だろう。ヴォーカルやピアノの音の美しさは特筆もので、これまでの愛聴盤のいくつかを何度も聴き直すことになった（※）。

※2014 年に手に入れた CD や聴いた番組で、心に残っているものはいくつもあるが、ヴォーカルで特に印象深かったのは次の 4 つです。

①「ヒリアード・アンサンブル」という、中世・ルネサンス音楽・現代音楽を専門とする男性 4 人の室内声楽グループがあるのですが、2014 年末に解散しました。クラシックの室内声楽グループとしては頂点を極めたグループです。このグループを初期の頃率いてきたポール・ヒリアーが指揮者としてアルス・ノヴァ・コペンハーゲンというこれまた、素晴らしくレベルの高い合唱団を率いて演奏した、ハインリッヒ・シュッツ（1585-1672）の宗教合唱作品の全集 CD があります。初期バロックを代表するシュッツのこれらの名作には、3 つの受難曲（マタイ、ルカ、ヨハネ）が含まれています。ちょうど百年後に生まれた大作曲家 J.S. バッハの同名の有名作品と比較して聴いてみるのもとても興味深いと思います。

②大雨の降る日（2014 年 10 月 5 日）に足を運んだ、文京シビックセンター・小ホールでの「三善

晃の音楽」の中で演奏された児童合唱曲「のら犬ドジ～童声合唱とピアノのための組曲～」の NHK 東京児童合唱団+NHK 東京児童合唱団ユースシンガーズの熱演。すごい迫力でした。残念ながらこの曲の CD は出ていないので、楽譜を入手してそれを読みながら思い返しています。

③念願かなって手に入れた、シンガーズ・アンリミテッド（女性1人男性3人の凄腕のメンバーが、多重録音を駆使した完璧かつ変幻自在のハーモニーを奏でてジャズコーラスの頂点を極めた、1970年代米国のヴォーカルグループ）の CD7枚のボックス・セット「Magic Voices」。20年以上も前の演奏なのにまったく色褪せないそのコーラスの輝きに息を飲みます。

④私にとって、シューベルトの歌曲集『冬の旅』は長年、「どうしてシューベルトはこんなにも不気味な暗い曲を書いたんだ？」と、いつ聴いてもひっかかりが残る、謎を含んだ作品でしたが、それを解き明かすべく、偶然古書店で出会った『冬の旅 24の象徴の森へ』（梅津時比古 著／東京書籍 2007）を読みながらじっくり聴き直してみました。比較的最近の録音である、パドモア（テノール）+ルイス（ピアノ）やギュラー（バリトン）+ベルナー（フォルテピアノ）で聴いたこともよかったです。歌手たちの迫真の歌唱のおかげで、作品の意味をより深くとらえることができたからです。